

たまいたま 川柳



日比谷公園の雪吊り

巻頭言

なごが幸せといひつゝ

願法みつる

江戸時代のこと。深川八幡宮祭礼の日。祭り好きの沢山の人が永代橋を渡りつつあるとき、橋の一部が崩落。千人以上の犠牲者が出た。或るオトコ。偶々掏摸に財布を盗まれたために、見物を諦めて帰宅したことで事故に巻き込まれなかったという。命拾いをしたというお話。これだけ予測不能な災害やら事件事故が多い浮世で、全く予期せず不幸に巻き込まれる人が、報道されるだけでもなんと多いことか。しかし、同じ現場で居合わせながらも、死に神や疫病神が薄紙一枚の差ですれ違う人もある。すれ違ったことすら全く気付かないままに。一方、予測可能な自然現象に対してさえ、寸刻の身の置き所が、偶然の差で幸不幸の狭い白道の両側に分かれてしまう。なんと、運命とは、未知であるが故に不幸であることか。しかし反面、幸せでもあることか。

人ひとり、何が幸せなのかは五欲の程度であろうけれど、ものは考えようではないか。「今」という時が無事に在ることを幸せと考えれば、十分である。哲学ぶった話ではない。たったひと時、肚の虫の問題である。例えば、川柳を詠じ読書できる「今」を、実は幸せなのだと自覚すれば足りる。嫌なら、足の向きを変えれば良い。気付かぬまま、隅田川に落ちない幸せも得られる。

日日是好

願法みつる

寸秒と億光年の余命表
来し方を明日の雲と論じ合う

砂利道へ砂利足している年の暮れ

灯を消して月光と居る無の世界

人生の哲理三色ボールペン

平成29年(2017年)

12月号 (No.697)

日川協加盟